

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00681

研究課題名（和文）Ideophoneと言語進化に関する日英対照を中心にした語用論・類型論的研究

研究課題名（英文）A pragmatic and typological analysis of ideophones and evolution of language with special reference to Japanese and English

研究代表者

金谷 優（Kanetani, Masaru）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：50547908

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、「イデオフォンは言語とその前駆体との橋渡的な要素である」というHaiman (2018)の仮説に基づき、イデオフォンを語用論的類型論の観点から分析することで、言語機能の進化の過程を解明することを目指すものである。まず、マルチモダル構文文法の枠組みでイデオフォンの多覚性の記述を行った。次に、イデオフォンの私的表現性に着目し、日英語のイデオフォンの多寡を説明した。最後に、子どもの発達過程におけるイデオフォンの使用を観察することで間接的に言語進化においてイデオフォンがジェスチャーと音声言語の橋渡的な存在であるということを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イデオフォンは、通言語的に分布の多寡はある（日本語には豊富で英語には少ないなど）ものの普遍的に観察されるカテゴリーである（Voletz and Kilian-Hatz 2001）。一方、言語分析においては、おそらくその有標性から周辺的な現象として研究が限定的であった。そこに近年研究が進展している言語進化という学際的研究領域の観点から光を当てることで、言語研究（とくに構文文法理論と語用論）におけるイデオフォンの記述を強化するとともに、言語進化と言語獲得の過程の平行性を示す経験的な証拠を加えることで、言語進化の研究にも貢献ができた。

研究成果の概要（英文）：Based on John Haiman's (2018) hypothesis that ideophones developed as a bridging element between current human language and its precursors, this research aims to elucidate the process of evolution of language by analyzing ideophones from the perspective of pragmatic typology. First, the depictive and multimodal expressive function that ideophones bear was described within the framework of a multimodal construction grammar. Next, based on the privateness of ideophones, the distributive difference of ideophones in Japanese and English was explained. Lastly, by observing the use of ideophones during children's language development, it was indirectly shown that ideophones served as a bridge between gesture and spoken language in the evolution of language.

研究分野：英語学

キーワード：イデオフォン 言語進化 構文文法 日英語対照 語用論 表出機能

1. 研究開始当初の背景

イディオフォンは英語の response cry (例: 寒い時に震えながら思わず表出される brrrr という音) や日本語のオノマトペ (例: プルプル) などを一般化する言語普遍的な範疇である。イディオフォンは、パンツァー言語学で用いられた「ideophone (表意音)」という用語がもとになっているが、日本語学では「擬音語・擬態語」、東南アジアの言語学では「expressive (表出語)」などと様々な用語で呼ばれてきたことから、秋田 (2021, p. 50) では、従来の研究が「地域、語族、ないし言語で閉鎖的に行われてきた」と指摘している。2010年代に入り、これらを「イディオフォン」(地域、語族、および言語を超えて観察される類似表現を統一的に扱う広義の ideophone) として統一的に扱う動きが出始めた。Dingemanse (2019, p. 16) は、イディオフォンを「感覚心像を表出する有標な語で構成される開放類の成員」(和訳は筆者) と定義する。一方、言語進化学の研究は、言語の起源とその進化を解明するために言語学の手法を用いて生物学や人類学などの関連分野と学際研究を進める形で、イディオフォン研究とは独立して進行していた。

このような背景の中、Haiman (2018) によって、言語進化の中でのイディオフォンの位置づけとして次のよう仮説が提案された。すなわち、現在我々が用いる音声言語はジェスチャーから進化したと考え、[前駆体 リンク 言語] という進化の過程において、「前駆体」としてのジェスチャー中心のコミュニケーションと音声中心の言語コミュニケーションの橋渡しの役割 (= リンク) としてイディオフォンが位置付けられるというものである。言語のジェスチャー起源説自体は新しいものではないが、写像的な音を用いて感情や知覚などを多角的に再現する機能を有するイディオフォンを表現手段としてのジェスチャーから伝達手段としての言語への橋渡しとして介在させる仮説は斬新で示唆的であり、深く検証してみる必要があったため本研究課題への着想に至った。

2. 研究の目的

上記「研究当初の背景」をもとに、本研究課題では、「言語の機能はどのように進化し、現在の姿になったのか」という問題設定を行った。そして、この問題に取り組むべく、以下の三点を明らかにすることを目的とした。

(A) 「言語使用の三層モデル」(Hirose 2015) に基づく語用論的類型論と関連付け、日英語の類型論的特徴とイディオフォンの多寡をパラメータ化する。

(B) (A) に基づき、イディオフォンが言語使用における位置づけを明らかにする。

(C) (A) および (B) に基づき、「ジェスチャー起源仮説」の妥当性を示すことで、本研究課題の設定した問題に答えるとともに、さらに一歩踏み込んだ提案を行う。

3. 研究の方法

文献調査、母語話者への聞き取り調査、動画資料の分析等を通して、日英語のイディオフォンを調査・分析し、構文文法理論と進化言語学の観点から理論化し、成果を関連学会や論文等で公開した。

4. 研究成果

日英語のイディオフォンの多寡に関する研究

日本語には擬音語・擬態語に代表されるイディオフォンが豊富であるのに対し、英語はそれほど多くのイディオフォンがないという事実 (秋田 2017) を説明するために、「言語使用の三層モデル」(以下、「三層モデル」) の観点から分析を行った。「三層モデル」は、話し手の二つの側面 (私的表現の発話主体である私的自己と公的表現の発話主体である公的自己) と言語使用に関する三つの層 (状況把握層、状況報告層、対人関係層) を想定し、三層の組み合わせ方と無標の直示的中心が公的自己にあるのか、私的自己にあるのかに言語間の違いを求めるという廣瀬幸生筑波大学名誉教授により提唱された文法と語用論に関する理論である (とりわけ、Hirose 2015 を参照)。Hirose (2015) に代表される三層モデルの一連の研究で明らかにされているように、英語は状況把握層と状況報告層が一体となっており、無標の直示的中心は状況報告層における公的自己に置かれるのに対し、日本語は状況報告層と対人関係層が一体となっており、無標の直示的中心は状況把握層における私的自己に置かれる。「感覚心像を表出する」と定義されるイディオフォンは、状況把握レベルを表出していると考えられる。たとえば、「犬がワンワンなく」という発話を想定した場合、ワンワンは鳴いている犬の様子を把握したまま表現しているのに対し、*A dog barks* の *bark* はワンワンと鳴いている犬を把握し、その状況を一段階高次元の伝達形式に昇華させていると言える (詳細は *Tsukuba English Studies* 40 で公刊した拙論参照)。三層モデルの重要な仮説の一つに、「公的自己中心の英語は公的表現が無標の表現レベルであり、私的自己中心の日本語は私的表現が無標の表現レベルである」というものがあり、日本語に私的表現性の高いイディオフォンが豊富であり、様々な文脈で使用できるというのは当然の帰結である。

一方、公的表現を好む英語では、報告形式に昇華した形で表現されるのが無標であるため、オノマトペの形で現れる表現 (*A dog barks* に対して *A dog goes bowwow*) は、幼児に向けられた発話や臨場感を高める場合などの特殊な文脈に限られるため、全体として数が少なくなると帰結した。

イディオフォンの表出性に関する研究

イディオフォンの使用に際しては、手ぶりや身振りが付随するとされる (Voeltz and Kilian-Haz 2001)。イディオフォンの下位分類である日本語の擬情語 (イライラ、がっかり、など) を用いて、実際に共起するジェスチャーにはどのようなものがあるのか、それらの意味合いはどのようなものなのかを実験に基づいて、調査した。その結果、日本語の擬情語の発話の際に有意なジェスチャーが付随すること、話者間でかなりの高頻度で共通のジェスチャーが生じること、共起するジェスチャーが表す内容は内在化した概念メタファーに基づく身体の動きであることを論じ、ジェスチャーも言語知識の一部である可能性を示唆した。次に、この事実を理論化するために、multimodal construction grammar (多覚的構文文法) の枠組みを用いて、日本語の擬情語の心的表示は図 1 のような心的表示を提案した。なお、表示の中で用いられている “analytic” および “affecto-imagistic” は、日本語のオノマトペの意味を分析するうえで二元的な分析の必要性を説いた Kita (1997) の用語を用いているが、必ずしも Kita の用法と完全に一致するわけではない。

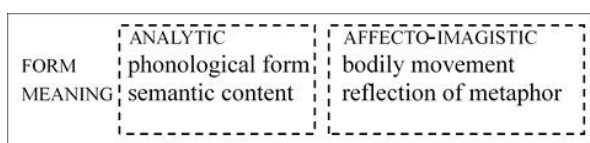


図 1：多覚的構文としての日本語擬情語の心的表示 (Kanetani 2021, p. 181)

図 1 は擬情語が「命題的な意味と形式の組み合わせ (analytic pairing)」と「感覚心像的な意味と形式の組み合わせ (affecto-imagistic pairing)」からなっていることを示している。前者は、言語の音形とその語彙意味内容 (例えば、「がっかり」という音形と「元気がなくなだれている」意味) の組み合わせを表し、後者は、身体の動きとそれが表す意味として内在化した概念メタファーを反映した意味 (例えば、顔を落とす動きと SAD IS DOWN メタファーを反映した意味) の組み合わせを表している。このように、ジェスチャーも言語知識の一部であることを表示することで、話者間で共通するジェスチャーが観察される事実を説明できる一方、実際の語の使用においては、必ずしもジェスチャーが共起するわけではない。それぞれの意味と形式の組み合わせが点線で囲んであるのは、この事実を図に反映させたものである。したがって、図 1 の表示は、基本となる心的表示として捉えるのが妥当である。日本語の擬情語と同じくイディオフォンの下位類として、英語の重複語 (例: *chitchat*) についても動画資料を分析することで記述研究を行った。調査の結果、有意なジェスチャーは観察されるものの、その頻度は低いため、図 1 のような他覚的構文としての心的表示を持っているとは言えないと考えるのが妥当だと結論付けた。

言語進化における語用論の役割に関する研究

研究成果 に基づき、言語進化における語用論の位置づけを論じた。言語が [ジェスチャー イディオフォン 言語] というという過程で進化したとする Haiman (2018) の仮説に基づくと、「イディオフォン」から「言語」への進化過程においては、図 1 における affecto-imagistic pairing の衰退が生じたと考えられる。このことは、研究成果 に記載の通り、実際のイディオフォンの使用においては、必ずしもジェスチャーが共起するわけではない事実に加えて、イディオフォンが他の構文と結びつくことで表出性が低くなるという観察 (Dingemanse and Akita 2016) によって支持される。この進化を動機づける語用論的原理として「量の公準」と「三層モデル」がある。まず、「量の公準」は「必要以上に言わない」というよく知られた語用論の原理である (Grice 1975)。イディオフォンは定義上、表出的であり伝達的ではない。一方、伝達を主たる目的とする音声言語の進化に伴い、より複雑な内容が伝達できるようになるにつれて、そこに組み込まれることで、図 1 における affecto-imagistic pairing は過剰な情報、次第に衰退していったと論じた。一方、「三層モデル」に基づき、研究成果 で論じた通り、日本語には私的表現性の高いイディオフォンが豊富であり、様々な文脈で使用できるため、analytic pairing だけが表示されるイディオフォン表現が日本語には多数存在するということになる。

言語進化における脱イディオフォン化

Dingemanse (2017) などで提案される「脱イディオフォン化」を構文文法と言語進化の観点からとらえることで、言語進化と言語発達の両方の過程で脱イディオフォン化が生じると論じた。「脱イディオフォン化」は、「イディオフォンが他構文と形態統語的に結合する引き換えに、その表出性を失うプロセス」(Dingemanse 2017, p. 363, 和訳は筆者) と定義され、例えば、研究成果 に記載したイディオフォンの「ギリギリ」が繫動詞「だ」と結びつき全体で述語を形成す

ることで表出性が下がる (Dingemanse and Akita 2016) ような現象を指す。研究成果 で明らかにしたように、イディオフォンが本来的に他覚的構文として図 1 のような心的表示を持つと仮定すると、脱イディオフォン化は、イディオフォンの基本的な心的表示である図 1 の表示から affecto-imagistic pairing の消失を伴うプロセスということが出来るが、このプロセスは、共時的には、より豊かな構文表示をもつ他覚的構文から音声と意味の組み合わせのみで表示される通常の語としての構文が出現する「スキーマ化 (Goldberg 1995) として説明することができ、通時的には、新たな言語記号の創発としての「構文化」(Traugott and Trousdale 2013) として説明することができる。このことは、概略図 2 の様に示すことができる。

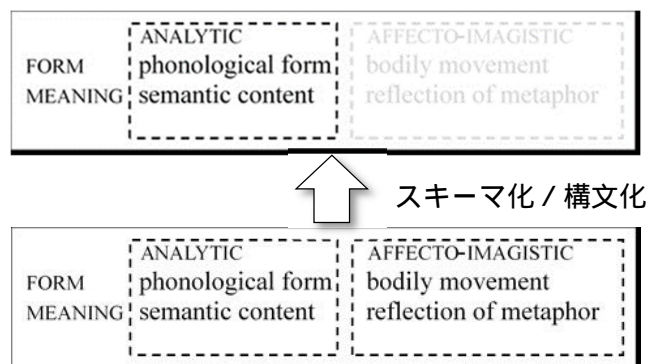


図 2 : スキーマ化・構文化としての脱イディオフォン化

この研究成果で明らかにしたことは、個体発生レベル (幼児の言語発達) と系統発生レベル (前駆体から人間言語の進化) において、脱イディオフォン化として捉えられるプロセスが平行的に生じていることを示唆しており、直接的に観察できない言語進化の過程を検証するうえで言語獲得と言語発達の過程が証左となると指摘した Hurford (2012) などの研究と軌を一にする。

関連現象としての *because* X 構文の研究

because X 構文は *I cannot go out today because homework.* のように、*because* に語が直接後続する新奇表現であり、その統語範疇は名詞、形容詞、感嘆詞など多種多様な品詞に及ぶことが特徴的である (以下、*because* に後続する語のことを「X 要素」と呼ぶ)。研究代表者は、本研究課題開始以前より一貫して *because* X 構文自体は公的表現であるが、X 要素が私的表現であり、以下のような表現構造を持つと主張してきた ([pub...] は公的表現、<priv...> は私的表現を表す)

[pub *because* <priv X>]

研究成果 によって明らかにしたイディオフォンの私的表現性と関連づけることで、*because* X 構文の X 要素が私的表現であることの意味合いが明らかになった。私的表現は、私的自己による状況把握をそのまま言語化した表現であり、特に公的自己中心言語である英語 (Hirose 2015) では有標となる。しかし、それをあえて伝達することで聞き手を近づける効果が生じると論じた。これは、幼児語では、英語でもオノマトペがそのまま出てくるという事実と平行的である (研究成果 を参照)。例えば、英語話者であっても幼児は、*bowwow* (ワンワン) を犬の意味で使うことがあるが、この場合、*dog/doggy* という恣意的な記号に対して、状況把握した状況 (犬が鳴く声) をそのままの形で伝えているという点で、状況報告において私的表現が具現していると言える。すなわち、公的・私的自己が未分化の段階にある幼児は、言語を問わず、状況把握の段階でそのまま伝達するという点であり、聞き手である大人 (例えば監護者) は、自らが発話者の把握した状況を共有するためにその発話に寄り添う必要がある。*because* X 構文は、オノマトペとは異なり、大人の話者によって広く用いられるが、私的表現を聞かせることで、聞き手を近づけるという点は私的表現性の高いイディオフォンによるコミュニケーションと通底する点がある。

引用文献

- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトペはあるの？」窪園晴夫 (編) 『オノマトペの謎』65-86, 岩波書店, 東京.
- 秋田喜美 (2021) 「日本語のオノマトペと言語類型論」窪園晴夫、野田尚史、プラシャントパルデシ、松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』49-73, 開拓社, 東京.
- Dingemanse, Mark (2017) “Expressiveness and system integration: On the typology of ideophones, with special reference to Siwu,” *STUF: Language Typology and Universals* 70, 363-384.
- Dingemanse, Mark (2019) “ ‘Ideophones’ as a comparative concept,” In Kimi Akita and Prashant Pardeshi (eds.) *Ideophones, Mimetics and Expressives*, 13-33, John Benjamins, Amsterdam.
- Dingemanse, Mark and Kimi Akita (2016) “An inverse relation between expressiveness and grammatical integration: On the morphosyntactic typology of ideophones, with

- special reference to Japanese," *Journal of Linguistics* 53, 501-532.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Grice, Herbert Paul (1975) "Logic and conversation," *Syntax and Semantics Vol. 3: Speech Acts*, ed. by Peter Cole and Jerry L. Morgan, 41-58, Academic Press, New York.
- Haiman, John (2018) *Ideophones and the Evolution of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hirose, Yukio (2015) "An overview of the three-tier model of language use," *English Linguistics* 32(1), 120-138.
- Hurford, James R. (2012) *The Origins of Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Kanetani, Masaru (2021) "Mental representations of multimodal constructions: The case of Japanese psychomimes," In Timothy Colleman Frank Brisard, Astrid De Wit, Renta Enghels, Nikos Koutsoukos, Tanja Mortelmans, María Sol Sandsiñena (eds.) *Belgian Journal of Linguistics 34: The Wealth and Breadth of Construction-Based Research*, 174-185, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Kita, Sotaro (1997) "Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics," *Linguistics* 35(2), 79-415.
- Traugott, Elizabeth and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.
- Voeltz, F. K. Erhard and Christa Kilian-Hatz (eds.) (2001) *Ideophones*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kanetani, Masaru	4. 巻 34
2. 論文標題 Mental representations of multimodal constructions: The case of Japanese psychomimes	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Belgian Journal of Linguistics 34: The Wealth and Breadth of Construction-Based Research	6. 最初と最後の頁 174-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/bjl.00044.kan	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanetani Masaru	4. 巻 10
2. 論文標題 A grammatico-pragmatic analysis of the because X construction: Private expression within public expression	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 F1000Research	6. 最初と最後の頁 965 ~ 965
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.12688/f1000research.72971.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kanetani, Masaru	4. 巻 40
2. 論文標題 On the Relation between Richness of Ideophones and Private-Self-Centeredness: A Comparison of Japanese and English	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tsukuba English Studies	6. 最初と最後の頁 267-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanetani, Masaru	4. 巻 37
2. 論文標題 Review of Johnson, Mark (2017) Embodied Mind, Meaning, and Reason: How Our Bodies Give Rise to Understanding	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 80-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金谷優、三野貴志、辻早代加、住吉誠	4. 巻 37
2. 論文標題 破格構文・周辺の現象から見える言語の一般的特性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 156-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Kanetani, Masaru
2. 発表標題 Pragmatics Meets Multimodal Construction Grammar in Language Evolution: How Gestural Communication Decayed
3. 学会等名 “The Place of Pragmatics in the Evolution of Language” Workshop at Joint Conference on the Evolution of Language (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 英語の重複語の表出性について
3. 学会等名 第10回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kanetani, Masaru
2. 発表標題 How Are Multimodal Constructions Multimodal?: The Case of Japanese Psychomimes
3. 学会等名 11th International Conference on Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 イデオフォンの日英類型論と構文分析
3. 学会等名 第8回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kanetani, Masaru
2. 発表標題 So many ideophones in Japanese but less so in English: A three-tier model account
3. 学会等名 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kanetani, Masaru
2. 発表標題 Toward a multimodal CxG analysis of Japanese mimetic expressions
3. 学会等名 52nd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金谷優
2. 発表標題 言語知識としての構文ネットワーク：Because構文を例に
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会におけるシンポジウム「破格構文・周辺の現象から見える言語の一般的特性」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 (編集) 廣瀬 幸生、島田 雅晴、和田 尚明、長野 明子(執筆) 廣瀬幸生、和田尚明、金谷優、井上優、大矢俊明、岡本順治、金善美、渡邊淳也、佐多明理、納谷亮平、石田崇、長野明子、島田雅晴	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 336
3. 書名 比較・対照言語研究の新たな展開 三層モデルによる広がりや深まり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Masaru Kanetani's webpage https://www.u.tsukuba.ac.jp/~kanetani.masaru.gb/
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------